



2024 年度

日本植物分類学会 講演会

2024 年 12 月 14 日 (土) 午前 10 時～午後 5 時

大阪学院大学 2 号館地下 1 階 2 号教室 (02-B1-02 教室)

(最寄り駅：JR 岸辺駅 / 阪急 正雀駅)

ハイブリッド形式 (現地およびオンライン配信)



Y. Higuchi



A. Nishimura



Y. Inoue



K. Mori



S. Fuse

講演スケジュール

10:00-10:10 ご挨拶 村上 哲明 (学会会長 / 東京都立大学)

10:10-11:00 横川 昌史 (大阪市立自然史博物館)

「さく葉標本から見た大阪湾沿岸の海浜植生の今昔」

11:00-11:50 樋口 裕美子 (京都大学生態学研究センター)

「葉の形状にまつわる生物間相互作用」

(11:50-13:30 昼食)

13:30-14:20 西村 明洋 (神戸大学)

「小笠原諸島固有の寄生植物シマウツボにおける生態と進化」

14:20-15:10 井上 侑哉 (国立科学博物館)

「センボンゴケ科を中心としたコケ植物の種多様性研究」

(15:10-15:20 休憩)

15:20-16:10 森 和男 (東アジア野生植物研究会)

「山の中でキレイな花と出会う」

16:10-16:50 布施 静香 (京都大学)

「東アジア・東南アジアで単子葉植物を探す」

16:50-17:00 ご挨拶 林 一彦 (大阪学院大学)

17:00- 懇親会

参加申込：<https://forms.gle/Vs6ABBeQou66eiHfA>

* 日本植物分類学会の非会員の方ので参加も歓迎します。

* 参加者多数の場合は、早期に受付を締め切らせていただく場合があります。

* 開催方法が変更になる場合は、登録メールアドレスに 2024 年 12 月 12 日までに連絡をいたします。

* お問い合わせ：講演会担当 高山浩司 (takayama@sys.bot.kyoto-u.ac.jp)



「さく葉標本から見た大阪湾沿岸の海浜植生の今昔」 横川 昌史（大阪市立自然史博物館）

大阪湾沿岸では、古くから埋立が進み、かつて広がっていた砂浜が失われ、多くの海浜植物が絶滅した。一方、各地の標本室には、大阪湾沿岸で採集された古い海浜植物の標本が残されており、これらは過去の海浜環境を知る重要な手掛かりとなる。本研究では、各地の標本室に保存されている 23 種 506 点の海浜植物標本を、採集年代や採集地ごとに精査した。その結果、現在では開発が進んでいる湾奥地域を含む大阪湾沿岸にかけて多様な海浜植物が生育しており、砂丘植生が広がっていた可能性が浮かび上がった。さらに、これらの標本は、様々な時代に様々な採集者によって集められたものであり、長い年月をかけて多くの植物誌研究者が大阪湾の海浜植物を記録してきた歴史も紹介する。

「葉の形状にまつわる生物間相互作用」 樋口 裕美子（京大大学生態学研究センター）

野生植物の葉はときに変わった色や形、模様を示す。こうした葉の形状は葉を食べる動物にとってどのような存在なのだろう。花の色や形が送粉者の誘引や選別に作用することがあるように、葉の形状も植食者に作用するのだろうか。演者らはこれまで、植物を加工する習性をもつオトシブミ科昆虫を対象に、葉の形が昆虫の加工行動や寄主利用にどのように影響するのか調べてきた。現在は葉の模様にも興味をもち、被食回避に影響しうるのか検討している。本講演では演者らの研究とともに、葉の形状にまつわる生物間相互作用についての既存研究もご紹介したい。

「小笠原諸島固有の寄生植物シマウツボにおける生態と進化」 西村 明洋（神戸大学）

植物は一般に光合成を行い、自立して生活することができる。しかし、中には光合成能力が減退し、他の植物から栄養分を奪って生活する「寄生植物」と呼ばれる植物が存在する。寄生植物は 4,500 以上の種が存在すると推測されており、その多様化の過程において宿主植物との関係性が注目されている。本講演では、小笠原諸島に固有の寄生植物であるシマウツボについて、近年明らかとなった繁殖生態と寄生能力の劇的な進化を紹介し、その進化過程を宿主植物と分子系統学的観点から考察する。

「センボンゴケ科を中心としたコケ植物の種多様性研究」 井上 侑哉（国立科学博物館）

約 2 万種からなるコケ植物には、陸上植物のなかでも並外れた耐久力をもつ種が進化している。センボンゴケ科は極限環境下で普遍的にみられるコケ植物セン類の一群で、乾燥地帯、重金属汚染地、極寒の南極や高山、石灰岩からなる特殊岩地など様々な極限環境に適応した種から構成される。世界に 1,200 種以上が知られておりコケ植物の中でも突出した種多様性であることから、センボンゴケ科は他の植物が進出できない極限環境へ適応することで多様化を果たした一群とされる。本講演では、東・東南アジア地域のセンボンゴケ科の種多様性や、オルガネラゲノムの解析から明らかになってきた本科の分子進化様式について紹介する。

「山の中でキレイな花と出会う」 森 和男（東アジア野生植物研究会）

小学校の頃理科の教科書でモウセンゴケを知ったが最初に出会ったのはコモウセンゴケの花だった。同じ日にモウセンゴケとイシモチソウ、ササユリ、カキランの花を見た。モウセンゴケの妖しい粘液とカキランの黄色の花の中の紫色の美しさに見惚れた。今その場所は宅地になりかつての花は影も形もない。それからお金ができれば日本各地の山野の花を見て、もっと多くの綺麗な花に出会いたい…と世界各地の高山植物の美しく咲く山を訪ねて高齢になったがまだまだ山に咲くキレイな花と出会いたい。栽培が出来る可能性のある花は栽培をしたいが 4000m を超える花の栽培は容易ではなく見ているだけ。

「東アジア・東南アジアで単子葉植物を探す」 布施 静香（京都大学）

野生植物を調べるための野外調査は、学問的な重要性があるだけでなく、私たちに自然の中で生きる植物の姿を知る喜びも与えてくれる。私はこれまで東アジア・東南アジアを中心に単子葉植物の調査を行い、標本収集、フロラ調査、系統推定、分類学的再検討などを行ってきた。本講演では、2012 年以降しばしば訪れているタイを中心に、東アジア・東南アジアの自然や野外調査の様子、調査で見られたさまざまな単子葉植物を写真交えて紹介する。また、調査の成果についてもいくつか紹介する。